

琉球大学学術リポジトリ

高機能自閉症児における社会性障害の改善に関する研究

メタデータ	言語: 出版者: 神園幸郎 公開日: 2009-03-06 キーワード (Ja): 高機能自閉症児, 社会性障害, 自己制御, ファンタジー, 自閉的ファンタジー, 共同注意, 愛着関係, 指さし キーワード (En): high-functioning autism, social disorder, self-control, fantasy, autistic fantasy, joint attention, attachment, pointing 作成者: 神園, 幸郎, Kamizono, Sachiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9087

高機能自閉症児における社会性障害の特徴とその背景
— 共同注意行動の分析を通して —

神園幸郎

Characteristics of social disorders in a child with high-functioning autism :
Through an analysis of joint attention behaviors

Sachiro KAMIZONO

高機能自閉症児における社会性障害の特徴とその背景

— 共同注意行動の分析を通して —

神園幸郎

Characteristics of social disorders in a child with high-functioning autism : Through an analysis of joint attention behaviors

Sachiro KAMIZONO*

This study investigated characteristics of social disorders in children with high-functioning autism. Subject was a boy with high-functioning autism. His joint attention behaviors, which emerged in play situation with specific other, were recorded from 4:06 yrs to 6:04 yrs. During this period, two specific others associated with him : one specific other in the first half, another in the second half. Frequency of his joint attention behaviors showed a similar pattern with both halves. In each half, the frequency was low in beginning, increased gradually afterwards, reached peak in middle and turned for decrease. The frequency pattern of joint attention behaviors correlated to qualitative changes of relationship with specific other. It was particularly discussed why social interaction between subject and specific other, which caused low frequency of joint attention behavior in later of each half, became weak.

key words : autism, social disorder, joint attention, specific other, high-functioning

I はじめに

近年の自閉症研究は、「カナーへの回帰」という言葉に象徴されるように、かつてのKanner(1943)の主張と同様に社会性障害を主症状とみる研究が中核をなすようになってきた。

自閉症児における社会性障害の本質を探る糸口として、最も身近な他者である養育者に対する愛着の形成過程は注目されるところである。自閉症児とその養育者との間の愛着の形成過程に関する研究はこれまで数多く行われてきた。それらの研究によれば、自閉症児は見知らぬ他者 (stranger) よりも養育者に接近・探索行動を示し、このことは精神年齢が等しい知的障害児や健常児と同じであること、さらに愛着行動の成立は象徴機能やコミュニケーション機能の発達と連関することが指摘されている (山上, 1999; Sigman, & Ungerer, 1984; Shapiro, Sherman, Calamari, & Koch,

1987; Capps, Sigman, & Mundy, 1994; Roger, Ozonoff, Maslin-Cole, 1991, 1993)。これらの結果は、自閉症児も養育者に対して愛着を形成することができることを示している。

小林 (1996) は、鯨岡 (1993) が指摘する関係力動論に基づいて自閉症を母親との関係の障害と捉え、母子関係に焦点を絞って治療的介入を行っている。小林 (1995, 1996) の研究によれば、自閉症状を改善するためには母子関係を調整することが重要であるとした上で、母親指導を中心とする治療的介入によって自閉症状の軽減が可能であるとしている。また、神園 (1999) は自閉症児の愛着形成と母親の意識変化との関係を検討し、次のような知見を得た。すなわち、子どもの養育に関する母親の意識変化は、母親による子どもの間主観的把握に影響し、結果として母親に対する子どもの愛着の質に顕著な影響を及ぼした。このことは、自閉症児の発達にとって、母親の意識変革が極めて大きな影響を及ぼすことを表している。

以上のように、自閉症児の発達にとって、養育

* Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

者との愛着の形成が重要であることは明らかである。しかし、他方、養育者との間に形成された愛着関係とそれを基盤として獲得された豊かな表現活動が、養育者以外の他者との社会的なコミュニケーション場面ではほとんど認められないという事実があるのも確かである。自閉症児における社会性障害の問題は、養育者との間に形成された二者関係が他者一般に対して波及していかないところにある(山上、1999; 岡田、1992)。従来から母子関係と母親以外の他者関係とを連続するものとしてみなすかどうかについては議論のあるところであるが、心的世界を有する存在としての他者理解を促し、自閉症児の社会性障害を改善に導くためには、母子関係を調整するだけでは十分であるとは言い難い。別府(1994)が指摘するように、養育者以外の複数の特定の他者との愛着関係を形成することが必要であると思われる。

自閉症児にとって、養育者以外の見知らぬ他者(stranger)が、特定の他者となり、愛着対象となる過程は、どのような経緯を辿るのであろうか。神園(2000)は高機能自閉症幼児と遊びを介して関わる特定の他者との関係性の変遷を愛着の形成という視点で前方視的に検討した。対象児は特定の他者へ愛着行動を示し、一定の愛着関係を構築できるものの、特定の他者が対象児に対して情動の共有場面を確保できなければ、その関係はすぐに停滞するといった脆弱なものであった。また、この研究では、対象児の言語表現が愛着関係の変化に伴って、その時点の言語水準までにたどった言語発達の過程を最初から順次たどりなすという、興味深い結果も得られた。しかしながら、神園(2000)が分析対象とした期間は、対象児が4歳6ヵ月から5歳1ヵ月までの8ヵ月間であり、愛着の成立とその後の経緯を記述するための観察期間としては不十分であると思われる。また、特定の他者との間で形成された愛着関係が、その他の特定の他者との愛着の形成にどのように影響するかを明らかにすることは、高機能自閉症児における対人社会性の形成の特徴を解明するうえで重要である。そこで、本研究は神園(2000)で分析対象とした期間に、新たな特定の他者とのかかわりの期間(15ヵ月)を追加して、特定の他者との愛着の形成過程とその後の経緯、さらには複数の特定の他者との愛着関係の形成過程を分析すること

によって、高機能自閉症児の社会性障害の特徴を明らかにする。

対象児にとって、遊び場面で関わる他者が「見知らぬ他者」から「特定の他者」そして、愛着対象として変貌していく過程や、複数の特定の他者との関係を形成する過程の背景には他者概念の発達を考慮しなければならない。Mundy & Sigman(1989)は、他者概念の発達が社会的コミュニケーション行動のひとつである共同注意行動を成立させる重要な要件であると主張した。また、Tomassello(1995)も同様に、共同注意行動の発達を他者理解の視点から論じ、子どもは他者を意図を有する主体として理解しはじめる1歳前後になって、他者との共同注意が成立するようになることを主張した。こうした研究から、他者認識の発達は他者との社会的相互作用場面における共同注意行動に端的に現れると言えそうである。確かに、対人社会性の障害を中核症状とする自閉症児が共同注意行動においても特有の弱さを持つとの指摘(Sigman, Mundy, Sherman, & Ungerer, 1986; Mundy, Sigman, Ungerer, & Sherman, 1986; Loveland, & Landry, 1986; Kasari, Sigman, Mundy, & Yirmiya, 1990; Mundy, Sigman, & Kasari, 1990; 別府, 1996)は、他者概念や他者認識の発達と共同注意行動が密接に関係していることを表している。そこで、本研究では対象児と特定の他者が関わる遊び場面において対象児が示す共同注意行動に着目して、高機能自閉症児における社会性障害の特徴を解明する。

II 方法

1. 対象児のプロフィール

本児は父35歳、母31歳のとき第1子として、帝王切開により出生する。妊娠2ヵ月目と4ヵ月目に切迫流産の兆候があったが、持ち直した。定額3ヵ月、始歩12ヵ月で運動発達上の問題はなかった。1歳の誕生日の頃はワンワンなどいくつかの言葉が出ていた。1歳3ヵ月には目が合わなくなり、つま先で歩くなどの特異な行動が出現しはじめた。1歳6ヵ月児健康診断で発達上の遅れが指摘され、1歳8ヵ月時に児童相談所にて自閉性障害児と診断された。この頃は、母親以外の他者を寄せ付けず、他者が近づくと声を出して威嚇した

り、部屋のドアを閉めたりした。2歳を過ぎる頃になると、文字や数字に関心を示し、2歳2ヵ月で簡単な文章が読めるようになった。アルファベットもすぐに憶えた。2歳6ヵ月頃になると消失していた自発語（りんご、みかんなど）が出はじめた。3歳を過ぎると語彙数が増加し、母親に対しては一語発話によって要求を伝達できるようになった。3歳3ヵ月時に保育所に入所し、障害児保育の該当児として処遇された。

保育所入所後も文字や数字へのこだわりは依然として強く、カレンダーや文字ブロックなどでの一人遊びが多く、それゆえ他児との関わりはほとんどなかった。保育所生活が2年目の夏、本児が4歳6ヵ月時に本研究の対象児として観察が開始された。本児は保育所に2年間通所した後、公立の幼稚園に就園した。本研究では本児意が4歳6ヵ月から幼稚園を卒園する6歳4ヵ月までの1年10ヵ月を分析対象とした。本児が5歳8ヵ月時に実施された新版K式発達検査における全領域の発達指数は106であった。

2. 手続き

対象児と母親は1～2週間に1回の割合で、筆者が所属する大学に通ってきた。遊びを中心とするセッションに入る前に、10分程度の茶話会を持ち、落ち着いたところでプレイルームに移動した。まず、本児と母親の自由遊びが約30分間にわたって行われた。その様子は同室するVTR撮影者によって収録された。次に、特定の他者（学生）が母親と入れ替わって入室し、30分間にわたって本児と自由遊びを行う。この間の行動も撮影者によって収録された。母親と特定の他者のそれぞれとの自由遊び場面におけるVTR資料は、すべて文字に書き起こされた。本研究では本児と特定の他者との自由遊び場面の資料だけを分析の対象とした。

本研究で分析対象期間とした1年10ヵ月の間に37回のセッションが実施された。本児と関わる特定の他者は、約1年経過後に別の特定の他者と交代した。第1回のセッションから第19回までの前半に関わった特定の他者を他者1、後半の第20回から第37回を担当した特定の他者を他者2として区別した。なお、両者ともに女子学生であった。

なお、各セッションのVTR資料から抽出された

共同注意行動は、前後の行動文脈も含めてDVDディスクに収録された。

3. 分析方法

1) 関係性の変遷

本児と特定の他者との自由遊び場面を収録したVTR資料と文字に書き起こされた資料（トランスクリプト資料）は、特定の他者、VTR収録者、そして筆者の3人によって分析された。3人の分析者は、本児の特定の他者に対する愛着行動や本児の行動特徴などについて独自に分析した後、その分析結果を持ち寄って、合議の上で分析結果を集約して当該セッションにおける所見とした。このようにして集積された37回のセッション記録に基づいて、本児と特定の他者との関係性の分析がなされた。

2) 共同注意行動の発達変化

本研究では自由遊び場面において観察可能な共同注意行動として、指さし、相手にモノを見せる行動（以下、showing）、そして持っているモノを相手に手渡す行動（以下、giving）の3種類の行動を取り上げた。各セッションのVTR資料から前後の行動文脈も含めてエピソードとして抽出された共同注意行動について、行動水準（応答的／自発的）、機能的水準（伝達的／非伝達的）、そして意味水準（叙述／要求）に基づいて分析が行われた。

III 結果と考察

1. 特定の他者との関係性の変遷

本児と他者1および他者2との遊びを中心とする活動を通して形成された関係性を、愛着の形成過程を中心に検討し、それぞれごとに以下に記述した。

1) 他者1との関係性の変遷

本児と他者1との関係の形成過程は、愛着の質的变化に基づいて以下に示した3つの時期に区分された。

(1) 第I期：母子分離不安とその克服の時期

初回のセッションでは、母親との自由遊びが終わり、母親が遊戯室から出て行くと、本児は不安そうに母親を眺め、その姿が見えなくなるまで戸口から見送っていた。そして、本児は遊びに誘おうとして他者1が差し出した玩具には目もくれず、母親が出ていった戸口を見つめていた。他者

1が本児を安心させようとして「お母さんは、向こうのお部屋でお勉強しているよ」と言うと、本児は「お母さんはお勉強している」、「お母さんは3階にいる」などと自分を納得させるような口調で何度もくり返した。こうした母親からの分離不安は、第3回のセッションまで続いた。この間は、他者1とのやりとりはもちろん成立せず、わずかにモンテッソリー教具の棒さしや型はめなどを試みる以外は、遊びといえる行動はほとんど認められなかった。本児はいわゆる移行対象と想定されるモノ、例えば、黄色いボールやミニチュアのダンゴを常に手に持ち、母親の所在を確認する言葉をくり返すのみであった。

セッションが4回目を過ぎる頃になると、本児は遊戯室にも慣れ、トランポリン遊びや追いかっこの身体運動遊びを好むようになった。こうしたダイナミックな遊びを通して、本児は他者1との身体接触や快の情動を共有する場面が増加し、逆に以前に見られた棒さしや型はめなどの一人遊びは減少した。身体運動遊びに伴う豊富な身体接触経験や快の情動共有体験によって分離不安は解消され、本児は次第に他者1への接近行動を示すようになった。この頃になると、本児は他者1の動作をモデルとする模倣行動や他者1へのgiving行動など、他者1への愛着の形成を伺わせる行動を示しはじめた。また、それまで指さしや動作で要求を他者1に伝えていた本児が、一語発話ではあるが、明確に言語的な要求行動をするようになった。

(2) 第Ⅱ期：愛着関係の成立

この時期になると、本児は他者1を心理的安全基地とみなした関わりを示すようになった。本児は、不安や不快な事態に陥ったとき、他者1を求める行動を示した。例えば、次のエピソードがそうである。遊戯室の黒板のチョーク受けにクレヨンが置いてあったため、本児が誤ってチョークを使って黒板に絵を描きはじめたので筆者が言葉で制止した。すると、本児は叱られたと思ったようで、やり場のない表情をしたあと、少し離れたところにいた他者1にすぎるような視線を向けた。それに気づいた他者1が本児に近寄り慰めると、本児は安心したような表情をして他者1に笑顔を返した。このエピソードから、本児は他者1を心理的安全基地とみなした関わりをしていることが

わかる。

また、他者1を心理的安全基地として愛着関係を構築した本児は、要求行動や言語行動においても、明らかに以前とは異なる特徴を示すようになった。例えば、他者1にモノや行為を要求する際に、本児は時には強い口調で、また時には甘えた口調で要求するなど、他者1の情動に訴えるような要求行動を示した。こうした口調は、本児が母親に要求する際の言葉かけときわめてよく似ていた。さらに、それまで一語発話による低調な応答に終始していた本児の言語行動は、ここにきて母親とやりとりする際の多語発話の水準に変貌した。こうした本児の行動は、本児が他者1を情動や意図などの内的世界を有する主体として理解しており、しかも自分に安心感や安全感をもたらしてくれる重要な存在として理解していることを物語っている。

この時期になると、追いかっこなどの単純な身体運動遊びは影をひそめ、代わってイメージ遊びが中心を占めるようになった。例えば、ブロックや縫いぐるみなどを使って、知っている童話を再現したり、お化けや悪魔のふりをして他者1の反応を楽しんだりする遊びなどが多くなった。また、輪投げの輪を床に置き、輪の中にペグ棒を立ててケーキに見立てたうえで、それにおしっこをかけるふりをして他者1の反応を楽しむといった、他者1の内面性に働きかける、いわゆる「からかい行動」も見られた。こうした事実から、本児の遊びが他者1とのやりとり自体を楽しむものへと変化していることが理解できる。

(3) 第Ⅲ期：関係の希薄化

本児と他者1との活発なやりとりによって展開された象徴遊びは、この時期になると急速に減退し、両者の関係は希薄になった。第Ⅱ期の象徴遊びは、本児自身の生活に根ざした経験を再現することで、遊びとしての展開が図られていた。この時期になって、本児が表現する表象としての場面や状況は次第に複雑化の様相を呈するようになった。当然のこととして、生活を共有していない他者1にとって、本児が表現した表象としての場面や状況は次第に共有され難くなった。それゆえ、先行する本児のイメージ展開に他者1は追従できなくなる場面が増えることになり、その結果、本児の象徴遊びは、本児だけに閉じた一人遊びとし

ての色彩が強くなった。さらに、一人遊びとしての本児の象徴遊びは、他者1とのやりとりを閉ざしている分、以前にみられたような展開が乏しく、同じことの繰り返しに終始した。また、この時期に頻発した風邪などによる体調不良は、本児のパタン化した象徴遊びに拍車をかけることになった。その結果、身体運動は極端に減退し、しかも声量が極端に小さくなり、本児の行動は以前とは大きく様変わりした。

パタン化した象徴遊びに固執する本児に対して、他者1はいろいろと遊びを工夫して何とか関わりを持とうとするが、本児は他者1の話しかけにほとんど応答せず、両者の関係性は一向に改善するさざしは見られなかった。しかしながら、他者1の直接的な問いかけに対する反応性は低いものの、他者1が腕に人形をはめて、声色を使って本児に問いかけると、即座に応答が得られるといった不思議な現象が確認された。

2) 他者2との関係性の変遷

本児と他者2との関係性は、愛着に基づく質的変化から次の3つの時期に区分された。

(1) 第I期：他者の交替による不安

遊びの相手となる他者が交替すると、本児はそれまで相手をしてくれた他者1がいないことに納得できないようで、何度も他者1に言及した。そして、母親との分離で不安なときや風邪などで体調がすぐれないときなどに決って見られたモンテッソリー教具の棒さし遊びが出現した。その間、他者2が話しかけてもまったく応答はなく、棒さしのひとり遊びに終始した。セッションを重ねるにつれて、他者1への言及は消失するが、他者2の問いかけに対する言語的応答は乏しかった。しかしながら、他者1との間でしばしば楽しく遊んだことのある身体運動遊びを他者2がはじめると、すぐに興味を示し、楽しそうに遊びはじめた。他者1との心理的距離を短縮したトランポリン遊びの導入を契機に、本児は他者2との身体運動を伴うダイナミックな遊びを共有できるようになった。こうした身体運動あそびを通して両者の身体接触の機会が増えるにつれて、両者の心理的距離は短縮した。他者2の膝に座ったり、他者2の動作を模倣したりといった接近行動が見られるようになった。しかし、他者2の問いかけに対して応答はするものの、やりとりは成立せず、モノを使っ

た遊びにおいてもモノをやりとりして遊ぶまでには展開しなかった。他者2との遊びが終わり、母親が迎えにくると、安堵したように明るい表情になり、他者2に対する声とは明らかに異なる甘え声で母親に話しかけ、抱きついた。このような行動から、この時期の本児は他者の交替に伴う不安反応に支配されていたことが窺える。

(2) 第II期：愛着の成立

この時期になると、他者2への接近行動は顕著になり、他者2との言葉によるやりとりは母親との対話と違いはない程にまで活発になり、他者2の行動の模倣が頻発するようになった。母親によれば、本児は「お姉ちゃん(他者2)とはいつ遊ぶの?」、「お姉ちゃんと遊びたい」などと尋ねることが多くなり、他者2との遊びを楽しみにしているとのことであった。おそらく、この時期に本児は他者2を愛着対象と見做していたものと推測できる。遊びの形態も以前とは大きく様変わりして、この時期はモノを使った見立て遊びが拡大し、架空の文脈を絡ませたイメージ遊びを他者2と共有して遊ぶようになった。例えば、電卓と犬や熊などの人形を使つての「お店屋さんごっこ」、ダンボールを家に見立てた「お家ごっこ」、土で汚れた人形をお風呂に入れたり、イヌの縫いぐるみを散髪するといった設定、さらには積み木で作ったベッドに人形を寝かせ、病人に薬を飲ませる設定など、本児の生活経験に根ざした様々なイメージ遊びが活発に展開された。しかも、遊びの展開において、本児は「~しようか」とか「~してもいい?」など他者2を意識した言葉が頻発し、これらの遊びが他者2との相互作用によって成り立っていることが明白であった。こうした本児の活発な遊びは、他者2に対するの愛着の成立に裏打ちされていたものと考えられる。

(3) 第III期：イメージ遊びの過剰な展開に伴う関係性の希薄化

第II期に活発になったイメージ遊びは、この時期になって変質した。第II期ではイメージの内容を他者2と共有し、相互作用のもとで展開されていた遊びが、この時期ではひとり遊びになってしまった。例えば、輪投げの輪をお皿に見立てたことから、おやつ準備、保育所場面でのごっこ遊びへ、さらには小学校場面、美容室など、次々と場面が目まぐるしく変わり、その都度次第に興奮

して声も大きくなった。この間に他者2が言葉をかけると、その言葉を遮るように自らの声量上げて展開中のイメージ遊びを他者によって中断されないような反応を示した。このように本児のイメージ遊びがエスカレートするにつれて、自問自答の言葉が多くなり、他者2が遊びに介入しようとして手を出すと、それを手で遮り、介入を拒んだ。それゆえ、本児のイメージ遊びは、自らに閉じたひとり遊びへ変質し、結果として他者2との関係が希薄になってしまった。イメージ遊び自体も他者2との相互作用を基盤にしていないために、展開が乏しくなり、パタン化してしまった。パタン化したイメージ遊びは、こだわりの性質を帯びはじめ、そのこと自体が、さらに他者2との関係の一層の希薄化を招くことになった。ただ、遊びにおける他者との関わりは希薄になったものの、他者2との基本的な愛着関係は変化がなく、他者2が「暑い」、「疲れた」と言うとき本児も同様に暑い素振りや疲れた素振りを示し、他者2との一体感を表した。

3) 他者1と他者2との関係性の類似性比較

先に指摘した本児と他者1および他者2との関係性について類似性比較を行った結果、次のような知見を得た。まず第1期において、他者1との関係では母親との分離による不安、そして他者2との関係では他者の交代による不安の拡大によって本児と他者の関わりがもてない段階から、身体接触を伴うダイナミックな身体運動遊びの段階を経て、本児が特定の他者に対して接近行動を示す段階に移行する過程は、両方の他者との関係性に共通して指摘できる点である。したがって、この時期は、本児が他者との愛着を形成する過程として特徴づけることができる。

第2期になると、本児は他者1と他者2の両者を心理的安全基地とみなした行動が出現した。こうした特徴は本児の行動の随所に出現し、とりわけ遊びの内容に顕著に現れた。この時期には第1期の身体運動遊びが次第に減少し、モノや表象を他者と共有した三項的共有関係による遊びが主流を占めるようになった。したがって、この時期は愛着の成立と遊びの共有の時期として特徴づけることができる。

第3期では、第2期で出現した表象に基づく遊びが拡大するにつれて、本児の内的活動が活性化

表1 本児と特定の他者の関係性に関する時期別特徴

	各時期の特徴	セッション回数	
		他者1	他者2
第Ⅰ期	愛着形成の時期	1～8	20～25
第Ⅱ期	愛着の成立と遊びの共有の時期	9～14	26～30
第Ⅲ期	内的活動を基盤とする一人遊びの時期	15～19	31～37

し、次第に肥大化した。その結果、本児は表象遊びを他者と共有できなくなり、遊びにおける三項的共有関係が崩れ、自己の表象に閉じた一人遊びの様相が強くなった。結果として、他者との関係性は希薄になった。それゆえ、この時期は内的活動を基盤とする一人遊びの時期と言える。

上述したそれぞれの時期ごとの関係性の特徴をセッションの回数とともに表1に示した。

以上のように、本児と他者1および他者2との関わりは約1年のズレがあるにも拘わらず、両方の他者との関係性が辿った経過は、きわめて類似していた。こうした特徴は自閉症児、とりわけ高機能自閉症児における対人社会性の一側面を表しているのかもしれない。

2. 共同注意行動の特徴

観察期間中に捕捉した共同注意行動の延べ回数は、指さし行動が圧倒的に多く230回、giving行動が71回、そしてshowing行動が53回であった。各セッションあたりの頻度をそれぞれの共同注意行動ごとに図1、図2、そして図3に示した。セッション1からセッション19までが他者1、セッション20からセッション37が他者2との相互作用場面である。共同注意行動の出現頻度は、他者1に比べて他者2とのセッションにおいて圧倒的に高く(他者1:128回、他者2:226回)、指さし行動では他者1の87回に対して他者2では143回、giving行動では同様に11回に対して42回、そしてshowing行動では30回に対して41回であった。他者1に比べて他者2との関わりにおいて、共同注意行動の頻度が高くなったことについては、いくつかの理由が想定される。1つは、本児に対する他者の関わり方や遊び方の違いが共同注意行動の

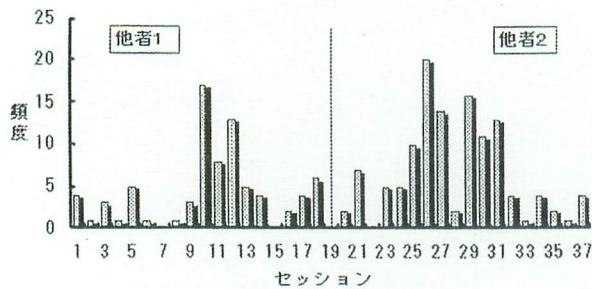


図1 指さし行動の頻度

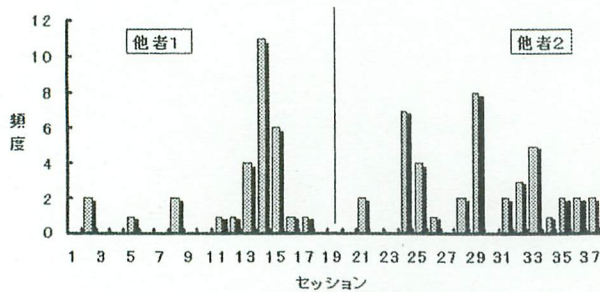


図2 giving 行動の頻度

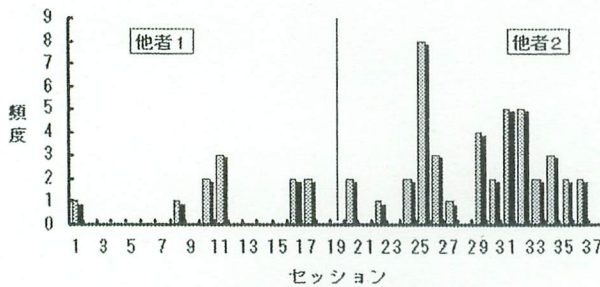


図3 showing 行動の頻度

出現頻度に影響したことである。2つは、他者1と他者2との関わりの間に存在する約1年の時間的なズレである。1年の時間の経過が、本児に認知や言語の発達をもたらし、そのことが共同注意行動の頻度を高めた可能性である。3つは、遊びの場や関わる他者への慣れが共同注意行動を促進した可能性である。先に指摘したように、他者1と他者2のセッション回数に伴う遊び方や遊びの内容の変遷は基本的に同様な過程を辿った。すなわち、母親との分離不安や他者の交代に伴う不安によって関わりをもてない時期にはじまり、身体接触を契機とする身体運動遊びの段階、モノを介した三項的共有遊びの展開、そして本児の経験に裏打ちされた表象遊びが中心の時期を経て、内的表象の肥大化した一人遊びに没入する段階に至る変遷である。このように、遊び方や遊びの内容が

同じような変遷を辿ったことから、他者2の関わりが他者1に比べて特に優れているとは考えにくい。また、両者の関わりについての筆者らの全体的な印象も同様であった。他者の関わりの違いが共同注意行動の出現頻度に影響した可能性は否定できないが、必ずしもその可能性は大きくはないとみてよいであろう。また、遊戯室などの環境や他者への慣れの影響も想定されるが、関係性の変遷で指摘したように、関わる他者への接近・維持行動を形成するに至るまでのセッション数が、他者1と他者2の間で差がないことから、共同注意行動の増加を慣れの要因だけで説明するのも困難である。最も可能性が高いのは、本児の認知・言語的な発達の影響である。なかでも、言語発達に伴う言語表現の豊かさは特筆すべきものがあった。本児における言語表現能力の向上は、他者2との活発な相互作用をもたらした。たとえば、ごっこ遊びやふり遊びにおいて、本児は場の状況や背景となる文脈を言語的に設定することが巧みになり、そうした発話に伴って共同注意行動が随伴する頻度も高くなった。以上のことから、他者2との関わりにおいて、本児の共同注意行動の出現頻度が高くなった主たる要因として、本児の認知・言語的な発達が想定される。

図4は3種類の共同注意行動の頻度をまとめてセッションごとに示したものである。この図から明らかなように、セッションの進行に伴って増減する共同注意行動の出現頻度は、他者1と他者2の場面で同様なパターンを示した。すなわち、両方ともにセッションを重ねるにつれて共同注意行動の出現頻度は次第に増加するが、10回を過ぎたころから減少に転じ、その後のセッションでは次第に減少傾向を辿った。他者1における9回目と他者2における28回目は、風邪による体調不良のため本児の活動が不活発な状態にあったことを考慮

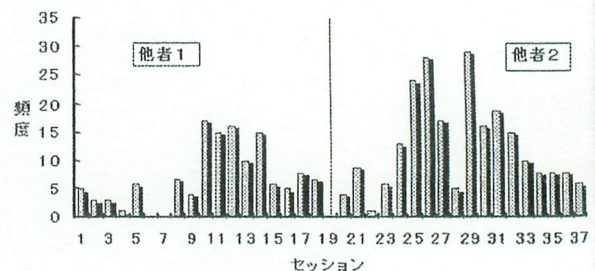


図4 セッションごとの共同注意行動の頻度

すると、上述したパターンは一層その特徴が顕著なものとして指摘できる。

この傾向は、それぞれの共同注意行動ごとにも明らかであった。giving行動(図2)やshowing行動(図3)では出現頻度が低いためにその傾向は明瞭ではないが、頻度が圧倒的に高かった指さし行動(図1)では、顕著な傾向が読み取れる。

このように、セッションを重ねるにつれて次第に増加した共同注意行動が、ある時期を境に減少に転じるのはどうしてだろうか。また、本児の異なる年齢段階において、しかも異なる他者に対して、前述したように同様な変化のパターンを示すのはなぜだろうか。そして、このパターンは高機能自閉症児に特有な現象といえるのだろうか。こうした問題について、以下に検討を加える。

先にも述べたように、共同注意行動は他者との注意の共有に基づく行動であるために、本児と他者との関係性を如実に反映するという特性がある。そこで、既述した本児と他者との関係性の変遷に関する分析結果に基づいて共同注意行動の分析を行ってみた。他者1との遊び場面(以下、他者1場面)と、他者2とのそれ(以下、他者2場面)の結果を図5に示した。表1の時期区分に基づいて、それぞれの時期ごとにセッションあたりの共同注意行動の平均頻度を示してある。

他者1場面と他者2場面の結果は両者の平均頻度は異なるものの、第1期から第3期にわたる平均頻度の増減の特徴はきわめて類似した。すなわち、両者ともに第2期の平均頻度が最も高く、ピークをなしていた。第1期は母子分離不安や他者の交代による不安のために関わりをもてない段階から他者への接近行動を示す段階への移行期として位置づけられていた。他者との関わりがまだ形成

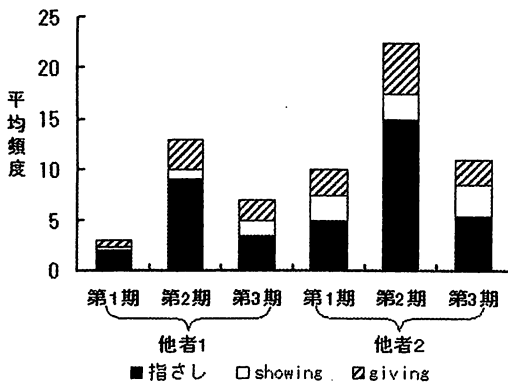


図5 時期区分に基づく共同注意行動

途上にあるこの時期においては、共同注意行動の出現は少なかった。しかし、母子分離不安や他者への不安が解消し、他者との愛着関係が形成されるようになった第2期においては、社会的相互作用行動が増加し、それに伴って共同注意行動の出現がピークに達した。ところが、本児のイメージ遊びが過剰に展開されるようになり、その結果、一人遊びが中心になって関係性が希薄になる第3期では、再び共同注意行動は減少に転じた。

先に指摘したセッションごとの共同注意行動に

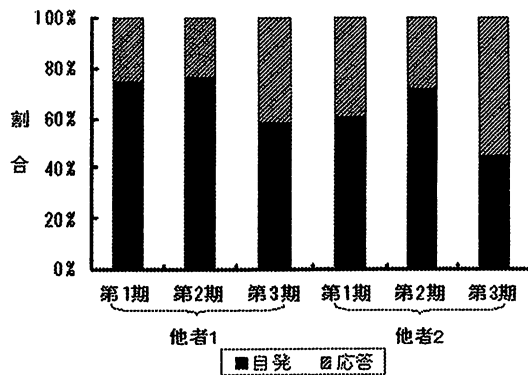


図6 時期区分に基づく指さし行動の出現契機

おける増減の特徴は、関係性に基づく平均出現頻度の分析において、その傾向がより一層明白になったといえよう。このことは、他者との関係性が共同注意行動の出現ときわめて密接に関係していることを表している。こうした特徴は、それぞれの共同注意行動において認められるが、出現頻度が圧倒的に高い指さし行動において最も顕著であった。そこで、指さし行動に焦点を絞り、以下の分析を行った。

図6は出現した指さし動作が自ら始発した自発の指さし動作か、もしくは他者の関わりに対して

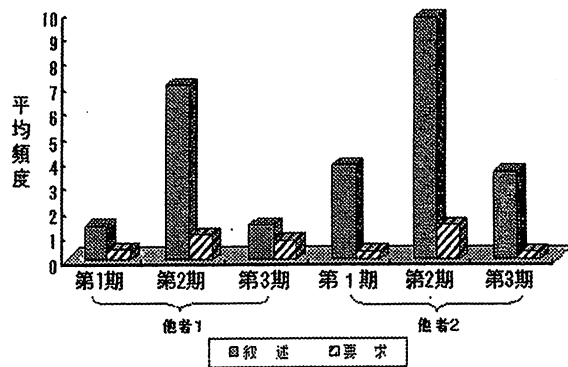


図7 時期区分に基づく指さし行動の意味

反応的に出現した応答の指さし動作かを行動水準で分類し、その割合をそれぞれの時期ごとに示したものである。両他者場面ともに、第3期になると自発の指さし動作の割合が減少し、応答の指さし動作の割合が増加した。関係性が希薄になった第3期においては、指さし動作の行動水準においてもこの時期の特徴が顕現化したといえよう。

図7は指さし動作の意味および内容の側面に着目し、叙述の指さしと要求の指さしに分類して、それぞれの時期ごとにその平均頻度を示したものである。両場面ともに、叙述の指さしが圧倒的に多く、先に図5で明らかになった指さし行動の時期別の変化は、叙述の指さしにおける出現頻度の変化を反映していたことがわかる。さらに、第3期に出現した叙述の指さしは、後述する指さし行動のエピソード分析に基づいて詳細に論じられるが、頻度の減少に加えてその内容においても異質性を示すことが判明した。

以上の結果から、本児の共同注意行動は特定の他者との関係性を直接に反映していたことが明らかになった。共同注意行動の出現の基盤は、本児と特定の他者との関係性の在り様に還元できるといえる。そうすると、本児と特定の他者との関係性の変節が、どのような契機のもとに出現するのかを明らかにする必要がある。このことについて、共同注意行動のうち最も出現頻度の高かった指さし行動に焦点を絞り、その出現に関する具体的なエピソードの分析に基づいて以下に検討した。

3. 指さし行動のエピソード分析

先の指摘によれば、第1期は母親との分離不安や特定の他者（以下、他者と略す）の交代による不安の拡大によって本児と特定の他者の関係がもてない段階から、本児が他者に対して接近行動を示す段階までの、いわゆる愛着の形成過程として位置づけられていた。このような第1期の特徴は、この時期に出現した本児の指さし行動にも明確に投影していた。次のエピソードはそれぞれ他者1と他者2との遊び場面で出現した指さし行動を表している。輪投げの輪とモンテッソリー教具の円筒を持って、部屋の端に輪と円筒を置く。他者が「はい。それ先生ね？先生それ？」と聞くと、本児は置いた輪と円筒の方を指さす。「うん、それ」と他者

が言う（第6回）。これは他者の質問に対して本児が指さしによって応答し、その意図を他者が汲み取り、代弁することでかろうじてやり取りが成立した場面である。このように他者の働きかけに対して、積極的に応答する場面は少なく、しかも母親とのやり取りでは活発な言語的コミュニケーションが交わされているものの、他者1との遊び場面では言葉ではなく指さしで応答することが多かった。また、次に示すエピソードのように、この時期に特有なこだわり行動が多く出現した。他者が「0になってから怪獣になる」と言って追いかけている。本児は少し考えてから指さしでカウントしながら「6, 0, 8, 0」と言う（第20回）。本児は以前から数字に対するこだわりが認められていたが、この時期にはそのこだわりが一層顕著になり、時には数字の形を指でかたどってそれを眺めるといった動作も見られるようになった。こうしたこだわり行動は、明らかに本児の不安を背景に出現しているものと解釈できる。このように、この時期の指さし動作は特定の他者との関係性を如実に表していることが明らかになった。

第2期になると、他者との愛着関係が形成され、他者を心理的安全基地とみなした行動が出現した。その結果、モノや表象を他者と共有した三項的共有関係に基づく遊びが主流を占めるようになった。こうした特徴は本児の指さし行動にも色濃く反映し、この時期に特有な指さし行動が認められた。本児と他者は相互に売り手と買い手になって買い物遊びを展開したり、ダンボール箱を家に見立てたお家遊び、さらに、スーパーマーケットの内装工事の場面を想定した「内装遊び」など、多彩な遊びが繰り広げられた。そして、次に示すエピソードのように、自己の行動の意味や場の状況を他者に説明する際に指さしが多用された。家の中にいろんな道具を運んできて、〇〇マートの内装をしている。「こっち〇〇マート、お菓子置いて、ないよ、こっち」と言って家の中を指さす。「お菓子はあそこにあるんだよ」と言って鏡の前の方を指さす。「ヤクルトも置いてくるよ」と言って家の中を指さす。このあと家の中に入る（第10回）。また、次のエピソードのように、本児は遊びの主導権を握り、他者に役割を指示して遊びを展開する場面も多く見られるようになった。他者とブランコをこぎながら言う。「お姉さん、お姉さんは眠り

まーす。こっちで眠りまーす」といってロッカーの下の方を指さす(第26回)。このように他者2との会話は、本児の言語発達の向上にも裏打ちされて的確に展開した。

しかし、他者との活発なやりとりによって遊びが発展的に展開される場面がある一方、本児の生活経験だけが一方的に再現される場面も多く認められるようになった。次のエピソードは、薬を服用するとき、薬をビタミン飲料に混ぜて飲む場面を再現したものである。他者が「おっけい、ない、〇〇ピタンでいいの。お薬？」と聞くと「〇〇ピタンにちよんちよんって入れてから、まぜるわけ」と指さしの手を空に円を書きながら返事する。「これは〇〇総合病院の薬」と言っている(第26回)。こうした場面が増えるにつれて、本児と生活を共有していない他者は、常に本児から説明を受けないと、場の状況や行動の意味を理解することができなかった。本児もまた自己の遊びの設定に他者を引き入れ、遊びを展開するためには、場の状況や自らの行動の意味を説明する必要に駆られた。

ところが、そのうち本児の説明では行動の意味が他者に理解されない事態がしばしば見られるようになった。以下のエピソードはセッション後、母親に聞き取りをしてはじめてその行動の意味が明らかになった場面である。すなわち、本児が母親とよく買い物に行くスーパーの観音開きのガラス製ドアが、常に片方だけが開くようになっていたことを再現しようとしているのだそうである。ダンボール箱を使ったお家遊びである。「また、〇マートになってから、こっちにとまるになってから」と言ってドア(ダンボールのふた)の前に立ってドアを閉める。他者のいる家のほうに行って、また元の位置に戻り「ドアが開いてから、それはこっちの低いところは開けない」といってドアを指さす(第9回)。

本児が自己の経験の細部に入り込み、他者が本児の行動を理解できなくなる場面に遭遇するたびに、他者は本児に説明を求めた。最初のうちは本児も何とか説明しようとするものの、そうした場面が多くなるにつれて、次第に本児の説明も少なくなった。そして、遊びの内容も当初の他者とのやりとりを中心とする遊びから、縫いぐるみや腕人形を使った遊びが多くなった。その結果、本児と他者の会話に基づく直接的なやりとりから、

人形を介した間接的なやりとりが中心になってきた。次のエピソードは人形におやつを食べさせている場面での本児の発話と指さし行動である。「お団子はここに置いて。お団子はまた、お団子はまた、20、ええっと」と口ごもったあと、「11日に食べる」と言うところで空を指さしする。「1日に、1日に5月の、今は6月でしょ？これから小学校がおわってから中学生？」と床を指さして離す(第27回)。お団子を入れる場所を指定することから、それを食べる日にち、そして、小学校、中学生へと話題が転々とする。結局、他者は本児の発話の意図が理解できなくなった。また、発話の際に出現した指さしも、その対象が明確に特定できるものではなく、思考を促進するかのような手振り、もしくはイメージ上の対象(例えば、カレンダー上の日付、学校の位置など)を指示するような動作が数多く認められるようになった。次のエピソードも同様に自己のイメージ上の対象を指さしで次々に辿っている。他者が操作する腕人形の牛は、靴箱の上でテレビを見ることにする。本児は「はい、はい、外でテレビ見た。はい、はい、あそこで、2階でテレビ見る」と指さす。他者が「2階あった？」と牛のいる靴箱を指差すと「2階はここ、2階は階段ずーっと上がってから、ここから回って、ここが2階。ここが、上が2階」と指さしの手を動かして自分のイメージを空に描いて話す(第29回)。次のエピソードは、おやつを作るお話でのやり取りである。「明日はチョコレートと、ええっと、明日はチョコレートと、ええっと、なんかオレンジジュース、オレンジジュース」と他者や撮影者が「オレンジジュース」と言って笑う。本児も笑いながら指さしの手を回しながら「オレンジジュース」「オレンジジュース」と言う。「ジュース」と指で空に形を描きながら「ジュースの9,8番の98番の、ねえ、焼いてから」と話す(第26回)。こうした場面で共通に見られる本児の行動特徴は、一点を凝視しながら勢い込んだように早口で同じことばを反復することであった。

第3期に入ると、上述した特徴は一層顕著になり、本児の遊びは、縫いぐるみや腕人形を使った一人二役的な振る舞いや、自己に閉じたイメージ遊びが中心になった。次に示すエピソードのように、人形を使ったイメージ遊びに入ると数字や日にち、曜日などへの強迫的なこだわりに入り込む

ことが多くなった。腕人形におやつを食べさせている。「これは、これは、26日に、26日に食べるの。これ、26日」「明日、明日食べる」「26日に食べる」「ん、日曜日に食べる」「日曜日も小学校に行くよ。日曜日も」と人形を指さして言う(第17回)。また、日にちや曜日などへのこだわりもさることながら、この時期になると一人二役的な言葉が出現しはじめた。上記のエピソードでは、26日が何曜日かを誰かが尋ねたわけでもないにもかかわらず、本児は「ん、日曜日に食べる」といかにも問われたことに応えるような口ぶりで話した。内的なイメージ世界におけるやり取りが言葉となって表出され、それに指さしが随伴するという特徴的な行動が出現した。

本児は一旦イメージの世界に入り込むと、次第に興奮し、目まぐるしく場面が変わったり、文字や数字へのこだわりがエスカレートした。その際に他者が関わろうとして声をかけると、その声を掻き消すかのようにわざと大きな声をあげて、他者の介入を阻止する行動が見られるようになった。さらに、本児が扱っている人形やブロックなどに他者が手を出そうとすると、その手を本児は遮り、介入を拒否した。その結果、本児の遊びはイメージ世界中心の一人遊びに終始するようになり、他者との関係は急速に希薄化した。本児は他者を見ることもなく、他者に声をかけることもなくなって、専ら自己の経験をベースとするイメージ世界に没入した。他者はそうした本児の行動を言葉で解説するぐらいしかできなくなった。ただ、次のエピソードのように、縫いぐるみや腕人形を介して、他者が本児に問いかけると応答したり、場合によっては簡単なやり取りが成立することもあった。牛に浣腸をする。他者が「「もれそう、もれそう、お腹痛いよー」と言うと、本児はブロックを置いて「はい、トイレに、こっちトイレ」と言いながら牛を乗せる。そして、少し離れて牛を指さす(第34回)。お店ごっこである。他者の人形が「おもちゃないのか」と言うと、「おもちゃ?」と言って立ち上がり、お店を指さして「こっちはさ、ご飯屋さんだのに」と言う。(第17回)。しかし、こうした応答ややり取りが見られるときでも、その言葉は短く、紋切り型であった。それぞれの他者は、本児との関わりの希薄さを何とか改善しようとして、第1期の初頭において効果を発揮した身体接

触を伴う運動遊びに本児を誘うが、功を奏せず、結局、関係の改善はもたらされなかった。

IV 総合考察

本児の共同注意行動は、他者との関係性に基づいた時期区分に対応して、その出現頻度が変化した。すなわち、他者との愛着関係を形成する過程として位置づけられた第1期においては、共同注意行動の出現頻度は低かったが、他者との愛着が成立し、それに伴って他者と遊びを共有できる第2期になると、活発な共同注意行動が出現した。ところが、その後、第3期になって両者の相互作用が極端に減少し、関係性が希薄になると、共同注意行動はそのことを反映して減少し、出現頻度は第1期の初頭の水準にまで低下した。このように、共同注意行動は、関係性の在り様を的確に投影することが明らかになった。ここで注目すべき点は、第3期になると他者との関係性が希薄になるという現象である。この現象は、1年間の時間的なズレをもって本児と関わった2名の他者に共通して出現したことから、きわめて確かな現象であると言えることができる。共同注意行動のうち圧倒的に出現頻度の高かった指さし行動のエピソード分析から、この現象の出現の背景について検討して、次のような知見を得た。すなわち、第3期になると本児の遊びは自己の内的世界に閉じた一人遊びが中心となり、その結果、他者との関係が希薄になった。他者との愛着関係が形成されると、しばらくして内的世界への傾倒現象が生じるようになり、他者との相互作用が消失してしまうのである。

従来、自閉症児が示す内的なイメージ世界への傾倒現象は「ファンタジーへの没入」、あるいは「自閉的ファンタジー」(辻井、1999)として指摘されてきた。そして、一般に自閉症児が示す自閉的ファンタジーは対人的な場面における不安や恐怖に対する彼らの自閉的防衛を成し遂げるために利用されるものであると言われている。つまり、ファンタジーに浸ることで、外界との接触を遮断し、その結果、自己を防衛しているというのである。ところが、上述したように、本児においては、対人的不安や緊張が想定される第1期においては、ファンタジーへの没入現象はみられず、むしろ

る特定の他者が本児にとって愛着対象となった後になって出現している。本児が示すファンタジーへの没入現象は、従来から指摘されてきたそれとは出現の背景が異なる可能性が考えられる。それでは、本児のファンタジーにはどのような背景が想定されるだろうか。

第1期は愛着の形成期である。この時期に、本児は見知らぬ他者との緊張と不安に満ちた場面において、見知らぬ他者の行動様式を取り込むこと、すなわち他者モデルの取り込みによって、緊張や不安を払拭しようとする。本児にとって見知らぬ他者は、徐々に特定の他者に変貌し、しかも社会的相互作用が拡大するに伴って、次第に愛着関係が形成されるようになる。他者モデルを取り込むことで、特定の他者との安定的で安心した関わりが保証される。しかし、その反面、他者モデルは自我の自由度を縛り、自らの意図に沿った自由な遊びの展開を制限する働きを持つようになる。それゆえ、特定の他者を愛着対象として関わるができるようになると、遊びの自由度を完全に保障する世界、すなわち、内的なファンタジー世界への傾倒現象が出現するのではないだろうか。はじめのうちは、自己の生活経験に基づいたイメージを特定の他者と共有することで遊びを展開しようとして、特定の他者に対してイメージ内容を解説していたが、次第に言語による解説に限界を見せはじめる。特定の他者の質問に対する本児の早口の言葉、吃音や反復、そして声の調子などは、自己の内的イメージや思考の展開を十分に表現しきれないもどかしさやイライラ感を物語っている。自己の内的世界を特定の他者と共有することに限界を感じはじめた本児にとって、自我の自由度を保障しうる世界、すなわち自らの意図通りに遊びの展開を図れるファンタジー世界は好都合である。本児のファンタジー世界への傾倒には、こうした背景を想定できる。

関係性の安定がファンタジー世界への傾倒現象をもたらすということは、また、次のように考えることができる。すなわち、関係の安定が自我の自由度を希求する要求の強まりを招き、その自由度を保障できる世界がファンタジー世界であったために、それへの傾倒が生じた。子どもの居場所となる抱える環境 (holding environment) が特定の他者によって提供され、そのことが本児の自

我の自由度を保障したと解釈することもできよう。本児と特定の他者との間に形成された愛着関係が、結果的に両者の関係性を希薄化する方向に作用した可能性も想定できるのである。

筆者らは、高機能自閉症児との対人関係を構築することを企図した臨床場面において、彼らとの間にある程度の相互作用を形成できるようになるが、その後はそれ以上の展開を望まず、次第に関係が希薄化していくといったことをしばしば経験してきた。こうしたこと背景には、ファンタジー世界への傾倒現象が極めて密接な関係を持っていることが明らかになった。従来から高機能自閉症児の社会的相互作用を阻む要因として指摘されてきたファンタジーへの傾倒現象が、上述したような対人関係の安定性を基盤として生じると仮定すると、彼らの社会性障害を改善するための介入方法について新たな展望を開く可能性が生じるのではないだろうか。このことについては、今後の課題としたい。

V 謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた対象児A君とご両親に厚く御礼を申し上げます。A君の健やかな成長を祈りつつ、ここに記して感謝の意を表します。

VI 附記

本研究は文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 課題番号15530431) の助成を得た。

VII 参考文献

- 別府 哲 (1994). 話し言葉をもたない自閉性障害幼児における特定の相手の形成 教育心理学研究, 42, 156-166.
- 別府 哲 (1996). 自閉症児におけるジョイント・アテンション行動としての指さし理解の発達: 健常乳幼児との比較を通して 発達心理学研究, 7, 128-137.
- Caps, L., Sigman, M., & Mundy, P. (1994). Attachment security in children with autism. *Development and Psychopathology*, 6, 249-261.

- 神園幸郎 (1999). 自閉症児の発達に及ぼす母親の意識変革の影響 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要, 1, 1-16.
- 神園幸郎 (2000). 自閉症児における愛着の形成過程: 母親以外の特定の他者との関係において 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要, 2, 1-16.
- Kanner (1943). Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-250.
- Kasari, C., Sigman, M., Mundy, P., & Yirmiya, N. (1990). Affective sharing in the context of joint attention interaction of normal, autistic, and mentally retarded children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 20, 87-100.
- 鯨岡 峻 (1993). セルフ・レギュレーションの萌芽 丸野俊一 (編) 現代のエスプリ, No. 314 自己モニタリング: 心・状況の変化を読み取る (pp. 25-36) 至文堂
- 小林隆児 (1995). 自閉症児の発達精神病理と治療: 生涯発達の視点から 自動精神医学とその近接領域, 37 (1), 25-31.
- 小林隆児 (1996). 自閉症児の情動的コミュニケーションに対する治療的介入: 関係性の障害の視点から 児童精神医学とその近接領域, 37 (4), 319-330.
- 岡田真子 (1992). 幼児期における自閉症状形成過程の検討 国際社会福祉センター紀要, 8, 39-64.
- Loveland, K. A., & Landry, S. H. (1986). Attention and joint attention in preschool children with autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 39, 951-962.
- Mundy, P., Sigman, M., Ungerer, J., Sherman, T. (1986). Defining the social deficits of autism: The contribution of nonverbal communication measures. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 27, 657-669.
- Mundy, P., & Sigman, M. (1989). Theoretical implication of joint attention deficits in autism. *Development and Psychopathology*, 1, 173-184.
- Mundy, P., Sigman, M., & Kasari, C. (1990). A longitudinal study of joint attention and language development in autistic children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 20, 115-128.
- Roger, S., Ozonoff, S., & Maslin-Cole, C. (1991). A comparative study of attachment behavior in young children with autism or other psychiatric disorders. *Journal of Child and Adolescent Psychiatry*, 3, 1274-1282.
- Roger, S., Ozonoff, S., & Maslin-Cole, C. (1993). Developmental aspects of attachment behavior in young children with pervasive developmental disorders. *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 30, 483-488.
- Shapiro, T., Sherman, M., Calamari, G., & Koch, D. (1987). Attachment in autism and other developmental disorders. *Journal of Child and Adolescent Psychiatry*, 226, 485-590.
- Sigman, M., Mundy, P., Sherman, T., & Ungerer, J. (1986). Social interactions of autistic, mentally retarded, and normal children and their caregivers. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 27, 647-656.
- Sigman, M., & Ungerer, J. (1984). Attachment behavior in autistic children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 14, 231-244.
- Tomasello (1995). Joint attention as social and cognition. In C. Moore & P. Dunham (Eds.), *Joint attention: Its origins and role in development*. pp. 103-130, Lawrence Erlbaum Associates.
- 辻井正次 (1999). 複合的大グループでの治療教育例 杉山登志郎・辻井正次 (編著) 高機能広汎性発達障害 (pp. 239-245) ブレーン出版
- 山上雅子 (1999). 自閉症児の初期発達: 発達臨床的理解と援助 ミネルヴァ書房, 129-157.